
うそつきのはこ

鋼野タケシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うそつきの箱

【Nコード】

N9030L

【作者名】

鋼野タケシ

【あらすじ】

ジヨンは誕生日に、おじいさんから不思議な箱を貰った。どんなウソでも見抜いてしまう、『うそ吐きの箱』……

【うそつきのほこ】

ジョンのおじいさんと来たら、わけのわからないガラクタを集めることを趣味にしている、時々ジョンにガラクタを見せびらかしては悦に浸っている。

子供のジョンよりずっと子供だ。記念日じゃなくてもガラクタをプレゼントしてくれるけど、記念日にもガラクタしかプレゼントしてくれない。

ジョンはおじいさんが大好きだったが、ガラクタ趣味だけは好きになれなかった。

「これはとても不思議な道具なんだ……あることを箱に言うと、この箱はうるさく鳴り出す。何かわかるかい？」

誕生日におじいさんから渡されたのは、真っ黒い四角の箱。手触りは木のようで、継ぎ目も何もなく、開けられない。

「あること？ うっん、全然わからないよ」

ジョンが素直に答えると、おじいさんはニコリと笑った。

「ところでジョン、パパとママは好きかい？」

「モチロンだよ。怒ってる時のパパは嫌いだけどね。それと、野菜も食べなさいってうるさく言う時のママは嫌いかな」

どうして今、そんなことを聞くのかわからなかったけど、ジョンは正直に答えた。

「それじゃ、好きな女の子はいるかい？」

ジョンはドキリとした。同じ学校のメアリーを好きだったことは、誰にもナイシヨだ。

「うっん、いないよ。学校の女の子はバカばかりだし、可愛くもないし、ボクは好きな子なんていない」

突然、箱がビービーとうるさく鳴り出した。

ジョンは驚いて真っ黒い箱を落としてしまった。カーペットの上に落ちて、箱はまたしばらくビービーとうるさく鳴っている。

「なに、これ」

音は段々と小さくなって、すぐにピタリと止まった。

おじいさんは楽しそうに笑っている。

わかりやすく言えば、その箱はウソ発見器だった。

「この箱にウソを聞かせると、箱は鳴りだすんだ。面白い道具だろう？ 海外に行った時に見つけたものさ。『ウソ吐きの箱』というらしい。本当はともお気に入りなんだけど、特別にジョンにプレゼントだ」

渡された箱の秘密を知って、ジョンは途端に嬉しくなった。

「宿題は全部終わったよ」

箱はビービーとうるさく鳴った。

「ボク、本当は女の子なんだ」

箱はビービーとうるさく鳴った。

「外は大雨だよ」

箱はビービーとうるさく鳴った。

ジョンは楽しくなって、その箱に向かってたくさんウソを吐いた。

どんなウソを吐いても、箱は絶対に見抜いた。

「昨日の誕生日で、ボクは十二歳になった」

箱はピタリと音を止めた。

本当のことを言った時、箱は少しも鳴らなかった。

なんてご機嫌なオモチャだろう。ジョンはおじいさんから貰ったプレゼントを、初めて気に入った。

元々ジョンは好奇心旺盛だから、このおじいさんのプレゼントに

向かって思い付く限りの嘘をついてみた。

そのおかげで、ジョンは面白いことに気が付いた。

「五年前の四月三日、この場所は雨が降っていたよ」

箱はビービーとうるさく鳴った。

五年前の天気なんて、ジョンはモチロン覚えてない。この箱は、ジョン自身がウソだと気付いていない言葉も見抜く。

未来のことはわからないみたいだけど、過去のことならどんなウソでも暴く。ジョンはますます楽しくなった。

この箱があれば、とても便利に達しない。ジョンは友達を呼んで、その箱を自慢した。友達たちの羨望の眼差しを受けて、ジョンは得意な気持ちになった。

箱を貰ってから、二ヶ月が過ぎた。流石にジョンも箱を使うのに飽き始めていた。

そこで考えるのは、『この箱をもつとユウコウにカツヨウする方法はないだろうか』と、そのことばかりだった。

ところで、ジョンの両親はいつもケンカをしている。

本当はとても仲が良いのに、ママがいつもパパを疑っているのだからケンカが絶えない。両親を好きなジョンはそのことに心を痛めていた。

「そうだ、ママがパパを疑ったら、この箱を貸してあげればいいんだ」

パパも本当のことを言うしかないし、ママもその言葉を信じるしなくなる。名案だと思った。

その夜、早速両親はケンカを始めた。最近、パパの帰りが遅い。ママは他の女性とパパが遊んでいるんじゃないかって疑っている。

「だから残業だって、言ってるだろ？ プロジェクトの遅れを取り戻すのに大変なんだよ」

「何よ、この前は仕事中にやることがないなんて言ってたじゃない」

元々ママは疑り深い性格だ。いくらパパが話したって聞きやしない。それに、パパは短気なところがある。あんまりママがうるさいと、すぐに怒り出す。

だからジヨンはケンカが激しくなる前に、二人に『ウソ吐きの箱』を見せた。

「コレは何のオモチャ？ え、おじいさんに貰ったウソを見抜く箱？ まったくもう、お父さんたらロクなことしないんだから……ジヨン、向こうへ行ってなさい」

「本当だよ、ママ。この箱は本当に、ウソを全部見抜くんだ。疑うんなら試してみてよ」

ママは眉間に皺を寄せながら、箱を受け取ってジヨンとパパから離れた。ボソボソと箱に向かって何かを呟く。

箱はビービーとうるさく鳴った。

ママは驚いて、箱をカーペットの上に落とした。カーペットの上に落ちて、箱はまたしばらくビービーとうるさく鳴っている。

半信半疑の顔をしていたママだったが、箱を拾い上げると色々なことを言った。ウソを言えば箱はうるさく鳴ったし、本当のことを言った時、箱は絶対に鳴らなかった。

「どうやら……本当みたいね。不思議だけど。本物のウソ発見器よ。さあフレッド。この箱の前で、本当のことを話してちょうだい」

「ああ良いさ。何度でも言っただけよ。私、フレデリック・マクレディは今日、会社の仲間とプロジェクトの遅れを取り戻すために残業をしていた」

箱は沈黙している。

パパは『そら、見たことか』と言わんばかりの表情をした。ママの手から箱を受け取ると、そのまま続ける。

「私は結婚してから、キミが疑うような不倫関係に陥ったことは一度もない。勿論、キミ以外の女性に異性としての好意を抱いたことはないし、下心を持って接したこともない」

箱は沈黙している。

「いつも言ってるだろう。私は家族を裏切るような真似はしないし、キミにウソを吐いたこともないんだ」

箱は沈黙している。

「私が愛しているのはこの世界で妻のナタリアと息子のジョン、それから自分の両親と、キミの両親だけだ。神に誓ったって良い。キミたちの為に命を差し出せと言われれば、私は喜んでそうする」

箱は沈黙している。

パパの言葉にはウソが一つもなかった。ジョンはパパのことを誇らしく思った。こんなにも家族を愛している父親が、他にいるだろうか？

ママは自分の疑いがただの言いがかりだと気づき、恥ずかしそうにうつむいた。安心しているようにも見える。

「ああ、ごめんなさい。アナタを疑うなんて、本当にどうかしていたわ。私も愛しているわ、フレッド」

箱は沈黙している。

ジョンは笑顔で抱き合う両親を見て恥ずかしくなった。子供の前だろうと、まるで彼らは恋人同士のように振舞うのだから、それを見せられるジョンはたまったものではない。

「いや、キミに疑いを抱かせてしまったのは私の落ち度かも知れない。これからはもう少し早く帰れるように努力するよ」

箱は沈黙している。

二人の言葉にウソはなかった。

どれだけ想い合っているにも、疑いは人の心を曇らせる。パパとママがケンカばかりしていることを知って、おじいさんはジョンにこの箱をプレゼントしてくれたのかも知れない。

あのおじいさんは本当に、何を考えているのかわからない。ただでジョンはそんなおじいさんが大好きだった。

ジョンは二人をからかうようにニヤリと笑って叫んだ。

「流石はボクのパパだね！」

箱はビービーとうるさく鳴った。

（後書き）

まとめようと思えば5行ぐらいでまとまる話だなあー。

こっいうシニカルな話は得意じゃありませんが、何でも書いてみないと練習になりませんからね。

や、ホラーとミステリーは書きませんけど。

ホラー＝怖いからムリ

ミステリー＝密室殺人のトリックは念力破壊光線↑こんなオチになりそう

ところで小説に無駄な改行入れるのって好きじゃないんですけど、ネットで読む時って改行があった方が読みやすいなー。と思って今回は入れてみました。どーなんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030/>

うそつきのはこ

2010年10月8日14時35分発行